

# 火野葦平自筆資料『山峡独語』紹介

増 田 周 子

本稿で紹介する文献は、火野葦平の自筆資料『山峡独語』である。冒頭に、「山峡独語（子等のために）」とあることから、子供たちのために「遺言」として記した原稿であり、「北九州文化連盟」の用紙十四枚に記されている。敗戦を迎え、昭和二十年八月二十六日、戦後一か月が経過しないときに、呆然自失したまま、母の郷里、広島県の比婆郡の山峡で記した独り言のような、身内だけに伝えるための原稿であろうと推察される。ただ、火野が、終戦直後、戦争中を振り返って、また、占領されていく日本の状況を憂い、どのようなことを考えていたのかがよくわかる独白で、独り言ゆえ、赤裸々に心情が吐露されていて貴重なものである。なお、本資料は火野葦平資料館に所蔵されているが、現在は北九州市立文学館にある。

さて、火野が、『山峡独語』を記していた用紙の組織、北九州文化連盟は、昭和十六年三月三十日に結成された。戦時中は、「時局の圧力のために文化といふものが不当の圧迫と地位とを与へられ、一種の文化の危機といふやうな疑念すら生じた時機があつた」<sup>(1)</sup>が、「文化運動が澎湃たる国民運動であり、文化のみの遊離した有閑運動ではなく、国民の決意の上に立つた新生活運動でなければならぬという方向」<sup>(2)</sup>を目標とし、「理論としてではなく、実践運動として具体的な形成をはじめ」<sup>(3)</sup>ていった。この実践運動の流れは、大政翼賛会の発足とも密接に関わっている。昭和

十二年以降、第一次近衛内閣の発足とともに、三木清は近衛文麿のブレーン集団であった昭和研究会の文化部門の責任者として熱心に活動し、「文化政策要綱」や文化省設置案を策定していた。昭和十五年には、第二次近衛文麿内閣が発足し、十月には近衛を総裁とする大政翼賛会が発足した。三木自身は「局外にとどまったが、文化部の設置を強く進言し、それが実現すると部長に岸田國士を推薦したという」<sup>(4)</sup>。こうして、大政翼賛会の文化部が岸田國士を中心として発足するのである。岸田は、次のように述べる。

大体文化部門といふのは比較的狭い意味で考へられてゐる。またこの翼賛会の中の文化部も、狭い意味での文化を担当してゐる処と考へられてゐるのでありますが、大体政治にしる、経済にしる、外交にしる、軍事も含めて、それは一国の文化の一つの現れであると思つてよろしい。さういふ意味の文化は、結局国の力そのものといふことにもなるのであります<sup>(5)</sup>。

このように、大政翼賛会文化部のトップ岸田は、文化を「国の力」ととらえ、文化の育成、発展を推進し、文化運動を国民運動として扇動していったのであった。そして、中央はもとより、その流れのなかで、地方文化運動が盛んとなり、各地で文化連盟が発足する。北九州でも、北九州文化連盟という組織が出来上がった。火野葦平は、北九州文化連盟で会長として中心的な役割を担う。そのため、この『山峽独語』も北九州文化連盟の用紙に記したのである。

さて、北九州文化連盟の綱領には、次の「1、我等ハカアル翼賛文化ノ建設ヲ目指ス」「2、我等ハ北九州に即セル新生活運動ヲ展開ス」「3、我等ハ良キ民族生活ノ復興ヲ圖ル」「4、我等ハ美シキ情操ヲ育テル一切ノ運動ヲ提起ス」「5、我等ハ国民ノ文化的方向ヲシテ祖国ノ運命ニ合致セシムルコトヲ期ス」<sup>(6)</sup>の五つが示されている。これだけを見ても、大政翼賛会の理念に沿った連盟であったことは自明の事実である。北九州文化連盟は、昭和十八年十月に、福岡県文化連盟が、福岡県文化報国会に改組され、これにあわせて解散することになった<sup>(7)</sup>。









戦時下で、火野は「国を愛する我々の誠実と責任とを惜しみなく傾ける」<sup>(8)</sup>という精神を抱いて文化を発展させようと北九州文化連盟を盛り立てていたのであった。火野だけでなく、国民は皆、天皇のために、祖国のために滅私奉公をし、お国のために働いた。兵士たちは戦場で命を落とし、銃後の人々も兵士を支え、国を守った。だが、最後には本土空襲を受け、多くの一般市民の命が失われた。そうして結果は空しく、日本は、昭和二十年八月十五日敗戦を迎える。火野はその時、どのように感じたのか。以下『山峡独語』の全文を掲載翻刻し、紹介したい。なお、判読できない箇所は○で示した。

## 山峡独語

(子等のために)

昭和二十年八月十五日、呆然たるなかに戦ひ終る。茲に一切の営為ごとごとく徒勞となり、全精魂をかけて没頭せしすべての努力水泡と帰す。悲憤胸奥にたぎり、唇を噛めば血をふくと、今や狂瀾を帰倒にかへすの道全くとざさる。何ごとの起りたるや。耳を疑ひ、眼を掩ひみるも、厳たるは敗戦の現実のみ。数日、痛憤の涙に暮れ、氣狂せんとして、為す所を知らず。勝利をのみ念じ、信じ、勝利一途にのみ全生命を傾けつくし、いかなる苦難をもいとほざりし身の、今一思ひ設けぬ敗北の日に遭ひて、かねて用意せしなにももあらず、失意と絶望に時を移すのみ。この日、忘るべからず。

何ごとの起りたるや、皇国三千年の歴史に一大汚点印されたり。然も国民の士氣沈滞して真に戦ふ力を失ひ、刀折れ矢玉尽き為すなきにいたりて旗をまきたるに非ず。苦難日に加はり、戦争未曾有の難局に立つといへども、国民いよ

いよ滅敵粉碎の感慨に燃え、未だ一兵をも上陸せしめざる本土要塞に充滿せる皇軍、烈々の闘魂に燃え士気天を衝くものあり。敵を迎へうたば必殺の戦法を以て宿敵を撃滅するの満々たる自信を抱きいたるに、突如、戦ひは終り、敗北を宣ぜらる。驚愕、呆然自失して、暫時、信をおき難し。然れども、勅なれば、いかにせんやは。深遠の聖断を以て、非常の措置をとり給ふ。赤子の痛苦に思ひを致され、おんみづからマイクの前に立ち給ふ。玉音聆肝口徹して、ただ、臣、慟哭あるのみ。

十年の辛苦、一片の泡と化すといへども、わがことは小さし。皇国今日の運命と明日を思へば、憂悶の情、日夜胸裡に散来して、寝ね難し。数日、門を閉じて出でず、人に会はずすごしたるも、決するところありて、この山峽に来る。志をさだめんと人里をはなれたれども、また、こは最後の別離たるべし。なにごともしらざる子供たち、山気を吸ひて健やかに長じ父の来るをよろこびて、顔を綻ばすことしきりなり。われもまた笑顔をもつて応じ、心に泣きて、子らを膝に抱く。早天このときはじめて曇るありて白雨、沛然たり。天地に秋氣満ち、夜に入りて軒を這ふ螢もすでに明日は見ざるべし。妻に覚悟をいひて、外に出づれば、雲一片とてなく、皓々たる月、峯の上に光る。満月なり。感傷嗤ふべくしてふたたび慟哭の情押へ得ず。乃ち、泣く。明日よりの歩武、退却なるや、前進なるや。以て、前進たらしめんとす。今にいたりて、身内に勇氣凜々たり。すでに早く生命をすてたる身の更に生命を惜しとも思はず。明日の運命を知らず、たとへ非命に墮るるも志は全し。ただひとつの命、君にささげんのみ。すべてはみことりのままにあらん。然れども、皇国悠久の榮光に傾忠をかたむけん宿志、いささかにてもなすところあらば幸とし、今日以後の命をさらに磨きて努めんと欲す。敵はいづくにあるや。ああ敵は内にあり。更に、新なる敵、今日以後に生ぜん。早くも、敵はその面貌を露呈しつつあり。今日の同志明日の敵となり、今日の結盟、明日は刃を交へんとするは恐し。暗愚蒙昧の責はこれをいはず。敗北の日の未だ明けざるに、敵軍進駐の風説、巷にあふれ、逃亡の民衆混

乱せるは止むなきとするも、昨日は米英撃滅を題目とせる指導者たち、たちまち今日、米英蘇支の国旗を作るの作業に没頭し、その意を迎へんとして、柳暗花明の設計を忘れざるは唯啞然として言葉を知らず。又、既に滔々として新日本を退散を説くの輩簇出す。われは無為無策にして、なすところを知らず、いふところを知らず、ただ当惑して数日を過したるに、豹変するの君子巷に満ちて、自家徒勞に〇々たり。昨日の同志、自家の壁間より皇大神宮を下し、軍人勸諭を削ぎ、外人専門の淫売屋とカフェの経営にのりだすといふ。然うして曰く、今、徒らに敵兵を刺激するは策の良とするところに非ず、しばらく隠忍して己を殺し、早く駐屯軍を撤退せしむるに如かずと。

新に台閣に烈したる諸公はいふ。好むと好まざるとに關らず、民主主義と自由主義の風潮世にあらはるべしと。風潮交錯していかに絢爛たるは意に介するなし。唯恐る、その風潮。わが純潔の道統を掩ひ穢さんことを。その頽廢の初光すで見ゆ。今日以後の戦ひはそのことにあらん。わが団結を恐るる敵は好餌快樂の色調を駆使して、分断を策し、統一するところなからしめんとするは必定なり。自由の美名、些か操士堅固なる者をも魅惑せんこともあるべし。今、敵はわが干戈を奪ひて君臨す。なさんと欲すればなにごとくも意のままなり。ポツダム宣言は〇淡として皇國の宿命を語る。わが清純の芽を掴まんとて、大獄も起るべし。憂國の烈士ごとく閉せられて、浮薄の者その勢をあらはし、さらに文明開化の楷〇は皇國道統に生きる者を固陋頑迷の徒として笑殺すべし。かくて日本は未曾有の危局にさらされ、敗北の眞の結果を将来せん。かくては皇國道統の炬火はわづかに同志の手によりて守らるるのほかならん。迫害と冷笑のなかに眞に生く。戦場に散るを潔しとし、黙々と白眼の中に生くるもまた男子の本懐なり。生命あらば、この一つの道のみ。

眉をあげ、胸を張り、嵐の中に立つを男の道とせり。苦難百鑿のごとく殺到し来るも、勝利の日の補ひを思ひて意に介せず。懐かしの家、疎開によりて地上より姿を消し、爆弾を蒙り、妹の一家博多に全滅せり。且つ、愛弟は沖繩に

玉碎すといへども屍を乗りこえ、大悲哀のさなかに立ちて、勝利の日を信じみたり。このとき、一切の苦難も悲哀も更に覚悟を深めるよすがとなりしのみ。これごとく国民の心懐たりき。萬里の波濤を跨りて蠻雨瘴癘の地に戦ひ、蜿蜒たる懸河を跋没して、対壘交鋒、戦友と屍をつらね、山野を馳駆したる日も、常に勝利の日を思ひて、兵隊は莞爾として散華せり。かなしき生命つみ重ねられ、大和島根は巖のごとしと唯信ぜり。今、敗北の日来りて、一切の痛苦長恨みを止むるのみ。支那に、満州に、南方に、尚も奮戦力闘するの将士、ことごとく敵に武装を解除せられて、捕虜となるといふ。夢にあらず。戦友の表情、眼前に髻髻して、また、悲憤新なり。この痛苦を克復し、この悲哀を生かし得べき復讐の日は何時ぞ。ああ、この文章、子らに残さんとて書けるものにあらざりしも、今、兀然として子らに告げんとするの心湧く。子ら、見るべし。子らに告ぐ。今日の皇国の屈辱を忘るるなかれ。今日以後の皇国の運命は一に汝らにかかはる。父今日の悲憤の情を継ぎて、謬るなかれ。

惟ふに重臣官僚、亡国の基をつくる。また資本家もその列に入るべし。げに頭門上に奢りて社稷を思はず、財閥富を誇りて国を売る。政府中に米英の租界ありて、聖戦は終りを全うせず。讀むべきは庶民かな。草莽なほ健在なれば皇国も全からん。今や国体を堅持するの一線に止まつて、すべては敵の意のままといふ。全日本武装を剥奪されし日には如何。国体に危殆なからんや。思へば膚に粟を生ず。このとき、国体を護持し、新なる死に場所を得んとして、ただ草莽は生くべし。重臣官僚、職を奉じて大言壮語するも、職を退けば恬として昨日の揚言を忘れて恥ぢず。或ひは屠腹するもあれど、ああ、悠久の皇統を御身一つに負ひ給ふ

陛下の御衷情に思ひをいたせば、血涙下る。臣等、ただ、勅のまにまに。

戦争終結して平和来るといへども、その苦き日常を思へば、明るき街も、空襲なき月明も唾棄すべし。われ、十七日夜、ひと度、刃をといて、身にあてがふ。志いまだ定まらざるにか、未練の思ひいでて、刃を置く。涙せきあへず。

いくたびか死にそこねたる身の棄つるをいとふにはあらねど、皇国屈辱の日を見きはめ、なすべきことわづかあるを  
仄かに悟れるに依る。志堅からずして、人を避け、この山峽に来る。母の郷里なり。母に教へられ、母に追隨して今  
日に来りたる者、志のふるさとかへりたる感懐切なり。また別に愚かなることをきくありて、一つの道も定まる。  
一将校、或る駅に来いたるに、すでに戦争は終了し、軍部は解散したるにより、一列にならばれたしと駅員いひたり  
とぞ。また、兵隊、水を求めたるに兵隊にのませる水はなしと。軍はなにをして居るかといへるもあり。ああ、道義  
かくの如く、また人情もかくのごときか。一參謀は笑つて曰く、これからさぞ軍人が輕蔑されることであらうと。そ  
の寂寥の表情に萬斛の恨をのむ。これらはすべて輕薄者の誣言たるはいふを俟たねど、今日、軍の立場すぐに昨日の  
儿にならざるは疑ふべからず。いはば落ち目たるの俗語、これに当らんか。昨日は軍の威信にたより、これを傘に着  
たる徒輩、今日掌をかへすかひぞ。ああ、軍人の苦衷はいかばかりぞや。胸裡の憂悶を消して、勅をかしこみ、肅々  
として城明け渡しを行ふその悲壯の姿は神のごとし。夢に冠絶せる光榮の皇軍、ここに解消するの未曾有の事態おこ  
る。然れども大伴物部のつはものの志悠遠の時をながれて消ゆることなければ、今はこれを恐しなどいはず。われ  
短方不学の身にして、今日あるは偏に軍のたまものなくんばあらず。その隆盛の時、その勢を借らんとする卑屈の心  
更になし。信ずるところのままに赴きしのみ。今日、軍の没落の日に遭ひて、これを去るはわれのとらざるどころ。  
最後まで軍と運命を供にし、静かに審判を俟たんのみ。同志友人等わが身を案ずるありて、暫く身を隠さんことをい  
ふ。その心情胸にひびき、友誼忘れ難し。さはあれ、身一個の起拳にして皇国の大事に災せんか、なにをもつてお詫  
び申すべき。この終にきたるべき何事をも予測し得ず。敵の手帖にわが小名ありと自惚るる能はざるも、然あるとき  
は敵の法廷において、所信を披歴し、敵のなす俣に委せんのみ。これわが草奔の唯一の道なり。  
われ嘗て、しばしば戰場に出でたるも遺言を残したることなし。日頃の言動、且つは書き残したるものごとく遺

書たるを以て、敢てその労をとらざりき。今、山峽に独談せんと欲して、おのづから子らへの文となる。子らよ。父はまことしやかにうるさきことをいひ残さず。ただ汝ら、今日の日を忘れずば、ただ勅のままに生き且つ死すべき草奔の男の子となれ。この志狂はずば進むべき道いかにあらうとも、今日の恥を雪ぐべき日は汝らのものたらん。いたづらに悲歌慷慨する勿れ。深き悲しみと歎きのなかに、美しく、強く、また惻隱の心も忘れずして、松柏の器となれ。敗北の日に、父が扇に記せし賛歌をここに止む。

山吹の歌

巷の垣にさりげなく

咲く山吹の美しき

かはたれどきに白雨きて

たたけど散らぬ花びらを

いかなるものしぐさぞや

ひとひら二ひら三ひらほど

土によごれて今朝ありぬ

散りて咲くてふものふの

ころに似たる黄の色に

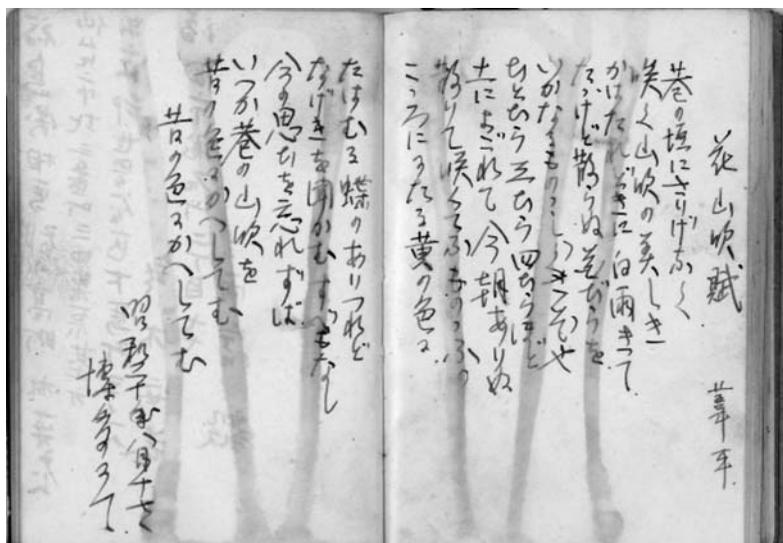
たはむる蝶のありつれど

なげきをきかむすべもなし

今の思ひを忘れずば  
いつか巷の山吹を  
昔の色にかへしてむ  
昔の色にかへしてむ

昭和二十年八月二十六日。廣島県比婆郡本中村字峯。谷口寅一叔父の家であれば、母の母なる人、八十二歳にして毎朝四時に起きいでて草を刈り、草履を編む。今年はやき出来といふ稲の波のうつくしく、山野に蔬果満ちて、潺湲のひびき絶ゆるなし。今日厚木に敵の第一次進駐部隊来るを思ひつつあれば白雲風にしたがつて西に流れ、子らわが四囲に笑語して載る。正午。臣 火野葦平手記。

この『山峡独語』は、火野が戦時中に見てきた記憶や実体験、さらには終戦後見聞きしたことに對しての気持ちを書かれている。そのため、過去の記憶と終戦時現在が交錯した内容となっている。食料も、武器もないまま山野の泥濘の中で戦い死んでいった戦友を思い、末弟の千博が無念にも沖繩上陸直前に戦死したことなども乗り越え、ただ一途に国のため、日本のために勝利を目指していたのに、あっけなく敗戦を迎えた。『山峡独語』冒頭には、昭和二十年八月十五日に突如敗戦の知らせを受け、「数日痛憤の涙に暮れ、気狂せんとして、なす所を知らず。(中略)失意と絶望に時を移すのみ。この日、忘るべからず。」と記されている。火野の敗北の無念さ、やりきれなさの思いが滲み出ている。『山峡独語』の中で特に印象的なのは、戦時中、死を決意して戦っていた火野が、敗戦を迎えて、何度も自殺しようと試みている箇所である。例えば、終戦二日後の八月十七日、刀を研いで自殺しようと試みるが、志が定



まらず、日本のためにまだなすべきことがあると泣きながら踏みどまったことが書かれている。『山峡独語』の中に記されている「山吹の歌」は、火野葦平の当時の手帖の八月十七日に「花山風賦」という題で、少しバージョンが異なるが、ほぼ同じ内容で記されている。一応、全文を画像であげる。

八月十七日は、『革命前後』<sup>9)</sup>では、西部軍報道部の解散の日となっている。酒宴の中で、火野葦平と目される辻昌介がこの「山吹の賦」を白扇に書き、憲法学者の安岡金蔵（鈴木安蔵）に贈呈したと書かれている。なお、「九州千早城」<sup>10)</sup>にもこの歌のことは「山吹賦」として記されている。

さらに『山峡独語』には、母の郷里の広島県比婆郡の山峡に  
いる間もまた、日本の憂える未来を案じ、火野は死のうと決意  
するが、やはり前進するしかないと思いとどまった様子が記され  
る。日本の敗戦は、火野にとって自死するに値するほどのシヨ  
ックだった。だが、死なずに、また、日本のために、「この痛  
苦を克復し、この悲哀を生かし得べき復讐の日」を夢見た。日  
本の未来を子らの世代に託そうするために、父として、敗戦の  
時の屈辱の思いを描いたのが、この『山峡独語』なのである。

また、『山峡独語』は、八月二十六日「厚木に敵の第一次進駐部隊来る」と決まった日に記されている。少し前まで敵として戦っていた外国人に占領されることの不安が、この『山峡独語』を書かずにはおられなかつた理由のようだ。天皇を崇め、戦っていた国の指導者達が、敗戦後すぐから、米国、英国、中国、ソ連を奉るようになる。その日和見主義的な動向にも、火野は啞然として呆れている。突然現れた価値観―民主主義と自由主義を謳歌するあまり、我が国の伝統が失われるのではないかという懸念も抱いている。また、進駐軍がどのように日本を占領していくのか、その点にも不安を感じている。進駐軍に寄り添い、売春宿や、進駐軍用のカフェを経営しようとする資本家たちも批判している。このように、占領されていくことへの不安と恥の思いは尽きない。ただ、火野は、今は「隠忍して己を殺し」、進駐軍を不用意に刺激せず、できうる限り早く撤退させることこそが最良だと述べている。よほど、占領されることは火野にとって痛苦だったのであろう。

さて、火野は政治の上層部や、資本家に対しては批判的だが、一方、草莽の臣、すなわち、民間にあつて地位を求めず、国家的危機の際に国家への忠誠心に基づく行動に出る人、つまり、大半の日本の国民に対しては高評価をし、自身の子に対しても「美しく、強く」「草莽の男の子となれ」と呼びかける。先にもあげたが、北九州文化連盟の重鎮として、組織の綱領の「5、我等ハ国民ノ文化的方向ヲシテ祖国ノ運命ニ合致セシムルコトヲ期ス」を守り、「なにもかもが国のためでなければならぬ」<sup>(1)</sup>として、文化を盛り立て、戦時中を生きていた火野にとって、終戦前後の価値観の突然の変革や、制度の改変は、測りがたい衝撃だった。敗戦後、質素に、しかし、日本を背負って立ち上るろうとする大半の貧しい庶民の姿がせめてもの救いだったのではないか。

本稿で紹介した『山峡独語』は、終戦直後の独白であるため、「今日の恥を雪ぐ」「復讐」などの過激な言葉を子らに伝えようとする点が散見される。だが、これは、終戦直後のことであり、そのうち火野は変化していく。いつまで

も、戦争や、戦時中の価値観にこだわりはしない。例えば、戦後に発表された『赤い国の旅人』では、「戦時中、軍と大政翼賛会との統制下にペンを鎖でしばられた体験は、思いだしても身ぶるいのする地獄であつた」<sup>12)</sup>とも書き、軍国主義の息苦しさも赤裸々に吐露し、本書では全てを勝ち負けで判断することの恐ろしさにも言及する。すなわち、この後、火野は、十数年をかけて、外国視察なども行い、自分の目で確かめることの必要性を説き、真の平和とは何か、自由とは何かを求めていくのである。

注(1) 火野葦平「地方文化運動の進路」(『百日紅』昭和十六年十二月二十五日、新声社)

(2) 同右

(3) 同右

(4) 谷和明「生活文化概念の史的検討―大政翼賛会の生活文化運動をめぐって―」(『東京外国語大学留学生日本語教育論集』平成九年三月三十一日、第二十三号)

(5) 岸田國士『生活と文化』(昭和十六年十二月二十日、青山出版社)

(6) (1)に同じ

(7) 有馬学「大政翼賛会と地方文化運動」(『文学の記憶 福岡1945』平成十七年七月二十七日、福岡市文学館)

(8) 火野葦平「北九州文化連盟」(前出)

(9) 火野葦平『革命前後』(昭和三十五年一月、中央公論社)

(10) 火野葦平「九州千早城」(『オール読物』昭和二十七年一月、第四十号)

(11) (1)に同じ

火野葦平『赤い国の旅人』(昭和三十年十二月二十五日、朝日新聞社)

(ますだ ちかこ・関西大学文学部教授・関西学院大学非常勤講師)